

子供と向き合い、現場から生まれた知恵

—橋詰先生インタビュー—

第4回（最終回） 専門性を残し、地域へ返す—これからの展望

第3回では、試行錯誤を通じて磨かれた橋詰先生の指導観と、全国からの研修への反響についてお聞きしました。最終回は、橋詰先生が長年かけて築いてきた専門性をどのように残し、次の世代へとつないでいくか—AI ツールの活用、今後の研修の形、そして「盲学校から地域への還元」という使命について伺います。

1 AI ツールへの継承—「子供と向き合うためのツール」として

【佐藤】

令和5年に先生の知見をデータとして活用させていただき、ChatGPT をカスタム化した「橋詰先生の生成 AI 指導支援ツール」を作成しました。この取組に関し、今回先生から「試してみることの大切さ」と共に「王道ですべての子供が救われるわけではない」との話を伺い、AI の回答の精度を高めることにはおのずと限界があることの理解が重要であることが分かりました。そのことを踏まえて、指導に当たる前段のマインドを伝えていかなければなりませんね。



【橋詰先生】

やはり子供と向き合っているという試すというのが基本なんですが、それだけだと効率が悪いですよね。ですから、生成 AI などのツールを使って効率を良くしながら、子供と向き合うために使えればいいのかなと思います。

【佐藤】

前向きに考えれば、AI に入力する項目を新たに設定し、利用に当たり「お子さんの実態についてこのことはどうですか？」と問われることで、教員が改めて目の前の子供をよく見ることにつながる可能性があるかもしれません。同時に、入力項目を通じて実態把握の観点を学ぶことができたり、フロスティング視知覚発達検査にあるような視覚認知の重要性を知るきっかけになったりするかもしれません。使い方次第で、指導の前提となる知識やねらいを伝えるツールとしてうまく活用できる可能性があると思います。

【佐藤】

オンデマンド研修のアンケートを踏まえると、先生のアドバイスへのニーズがすごくあると思うんです。そこで、例えば、先生が盲学校にいらっしゃる間に、ホームページ上に質問の窓口を設けるのはどうでしょうか。質問項目を設定し、先生にはテキストで回答を作成してもらおう。質問の概要とその回答は公開を前提にさせていただきます。その上で、そのデータを生成 AI のカスタム化にも活用させていただく。

【橋詰先生】

期限を区切って取り組む形で進めていただければ、可能だと思います。

- ▶ 「橋詰先生の生成 AI 指導支援ツール」は道視研 Web サイト「スタバ」上で公開中。AI への入力項目設計を通じて、教師が子供の実態を多角的に捉える力を育てる仕組みへの改善を目指しています。

2 今後の研修の形—対話とアーカイブの融合

【佐藤】

研修についてですが、今年もお願いするということで、全国への発信や道内の配信を含めると計7回になりますね。次の展開として考えていることはありますか。

【橋詰先生】

最初はとりあえず基本的な考え方を話した後、事前に質問を受けて時間を半分くらい取って、それに対して「こんな考え方で指導したらどうだろうか」と受講生に考えさせるような展開ができるかなと思います。

【佐藤】

例えば、本編で従来の基本的な研修を行い、「ここまででいったん終わります」とした上で、その後は自由参加のQ&Aセッションにすることはできないでしょうか。Zoomなどのオンラインでリアルタイムにし、質問アプリを使ってその場で受け付ける。ポイントの高い質問から先生が答えていくようなシステムです。

【橋詰先生】

答えられないことはないですが、終わった後から「あ、もう少しこれを言えばよかったな」と必ず出てきますね。事前に質問をもらえた方がやりやすいのは確かです。翌日答えていくような形なら、だいぶ考えられてうれしい。

【佐藤】

それでは、本編の中で5分ほどの休憩時間を設定し、ここで当日の質問を書いてもらう。そして、後半は事前の質問に関連し受講生に考えさせるような内容とし、当日頂いた質問については、後日アーカイブとして整理する際に加えていく流れがよいかもしれませんね。

▶ 「本編+Q&Aセッション+後日アーカイブ整理」という三層構造の研修形態は、即興の臨場感とじっくり考えた回答の精度を両立する新たな実践として構想されています。

3 盲学校から地域へ—専門性の還元という使命

【佐藤】

先生の研修動画や資料をホームページに載せてオープンにするのは良いことと思うのですが、全て一般に公開すればいいというわけではないと考えています。アンケートにも「普通の小学校でも使える」という声を頂きましたが、だからといって「通常校の皆さんも研修に参加して学べます」という形は取ってきませんでした。言い方は難しいですが、専門性はある意味、特別支援学校の「存在意義」ですよね。橋詰先生がまとめられている知見は、盲・視覚支援学校が地域に必要とされるためのとても重要なリソースだと思うんです。だからこそ、まずは盲学校の先生方にしっかりと学んでもらい、そこから地域へ還元して行ってほしいですね。

【橋詰先生】

そうですね。せっかく盲学校の中で培ってきたものですから、まずは盲学校の先生方が実践し、そこから学んで地域に生かしていつてもらいたいという気持ちはありますね。

【佐藤】

先生が持っている専門性や経験を残していくということは、本当に大切なことと考えています。先生の経験が貴重だと思うのは、ロービジョンのお子さんに関しこれだけのケースを経験し、成果を重ねることは現在では困難なことがあります。先生が培ってこられた専門性と、経験に基づくアドバイスを必要としている方は多いのではないのでしょうか。

▶ 盲学校が培ってきた専門的実践を地域に開いていくこと—それは情報共有と共に、視覚障害教育の存在意義を社会と共有することでもあるのかもしれません。橋詰先生の取組は、いまだにその最前線

に立つ実践のひとつに違いありません。

◆ 連載を終えて

全4回にわたり、橋詰先生の歩みと実践の哲学をお伝えしてきました。「子供と向き合い、いろいろ試してみる」—この言葉には、マニュアルや理論では代替できない、現場で積み上げてきた知恵と誠実さが宿っています。その経験がオンデマンド研修・AI支援ツール・地域連携という新たな形で次の世代へと受け継がれていくこと、そして各盲・視覚支援学校の先生方が自校の実践へとつなげていかれることを願っています。

「子供と向き合いいろいろ試してみることが基本。そして、子供が思わず頑張ってしまうような方法を探してあげられるといいですね」—橋詰先生

インタビュー構成：北海道札幌視覚支援学校 佐藤暢洋・小松太一郎